

の大風おほいかぜに、よく吹き潰つぶされぬものだなあ、しますと、其輩そのあしどもが「そりやあな、貴下あなたは、此大風このおほいかぜに抵抗ていこうして争あそふからいけません、私等わたしは、ごらんの通り、ちよつとの風かぜにも、直ちき頭あたまを下さげます、だからこんななに助たすけて居いますのさ」と答こたへました。

馬うまの咄はなし

(一) 馬うまの忠義ちゆうぎ

馬うまが、人間にんげんに對たいして親おやしみの情じやうを顯あらわはすことは、犬いぬや象ぞうにも劣せうりますまい。親切しんせつな主人しゆじんの聲こゑを聞きわけて、呼よべば直すぐ飛とんで來こる事ことなどは、ぢや覺おぼえて仕舞しまひまして、主人しゆじんが居いれば喜よろこんで居いるし、主人しゆじんが留とどまにでもなると、何なんだか不愉快ふげきな、引ひつたない風かぜをして居いります、仕事しごとでも、主人しゆじんと一所いっしょなら喜よろこんで仕します。時々ときどき、知しらぬ人ひとに向むかつては、隨ま

分ぶん亂らん暴ぼうな事ことはしますが、自分じぶんと親したしい人ひとには、餘よ程ほど、ひどい目めにでも遭あはされなければ、決かして不ふ忠實ちゆうじつな事ことは致いたしません。

夫それで、忠義ちゆうぎな馬うまのお話はなしも隨分ぜいぶんあります、今度こんどの日ひ露戰争ろせんそうに於おいても、まだ傳つたはる隙ひまはありませんが何なにれ、可愛相かあひそつな馬うまのお話はなしなども、だんく聞きえる事ことと存ぞんじます。

これは、西班牙いすぱにあでの戰争せんそうに付ついての話はなしですが、佛ふつ蘭らん西軍せいぐんの騎兵きへいの喇叭手らっぱしゆが、立派りっぱな馬うまを隊たいから與あたへられて非常ひじょうに可愛かあひがつて居いりますと、馬うまも、此新このしん主人しゆじんに對たいして大層たいそう愛情あいじやうを顯あらわはす様ようになりました。其その一例いれいを云いつて見みますと、何處どこに居いつても、一寸ちゆうぶんでも喇叭手らっぱしゆの聲こゑが聞きこえるか、其姿そのすがたが見みえるか、尙驚なほおどろくべき事ことは、喇叭らっぱの響ひびきでも聞きこえ様ようものなら、もう大騒おほさわぎだ、中々なかなか、じつとして靜しずかにはして居いな

い位

それに、不思議なことは、此喇叭手が騎れば、頗る喜んで忠義に立ち働きますが、他の騎手に對しては丸で駄目なのです。夫は一度、都合があつて、此馬が他の隊へ回はされて、或士官の乗馬にせられた事がありましたが、さっぱりいふ事を聞かないで、元喇叭手の所へ逃げ返つて來ましたので、仕方なく、又元を通り、喇叭手の乗る馬と定められました。

夫からといふものは、殆んど三年の間、此喇叭手を載せて、戦争中、數知れぬ危い目を助けてやつて参りましたが、或時のこと、此喇叭手の隊が、ひどい敗軍をして、其退却の混雑の際彼は重傷を負うて、戦死したが、其死屍は、餘程の日數経つてから、發見された、そして、其時まで、此忠義

な馬は、其場にちやんと立つて居ました、此永の間彼は決して、主人の側を離れないで番をして、水も飲まない、物も食べないで、鳥などを逐つて居たのゝ見えませす、夫で、見付けられた時分には、もうひどく弱つて居ました、手傷からでもありましたが、多分は悲しみの餘り食物を食べなかつたからであります。

(二) 馬の復讐

馬は、元來、やさしい性質のものですが、夫でもひどい目に遭つた事などは、よく覚えて居て、復讐をした話が澤山あります、嘗て亞米利加のポストン近くに住んで居た人が、いつも、野に飼つて置く馬を捕らへようとする時は、容器に、幾らかの麥を容れて餌に持つて行きました、そして、馬を呼んで、其やつて來て、麥を食つて居る所を、いきなり手

綱をかけて擒つて仕舞ひました、夫ばかりなら、まだしもですが、時には、容器に何も容れて行かないで欺すこともあります、そこで、馬も遂には主人のすることを疑ふ様になつて來ました、夫で或時のこと、主人の呼ぶにつれて、馬がやつて來て、ちよつと容器を眺めて、其空虚なのを見るや、いきなり、後足で立ち上つて、前足を舉げて、ボンと主人を蹴つて、其席で即死して仕舞つたといふ事です。

(三) 交際好きは動物

それから、馬は中々交際好きでして、馬に依ると、自分等丈で、厩に居たり、野に居たりするのは大嫌ひで犬でも、牝牛でも、山羊でもよい、羊でもよい、一所に居てさへくれれば喜んで居ます。

此馬の交際に付いても面白い話があります、

英吉利のブリストルの紳士が、一匹の犬を飼つて居ましたが、此犬はいつも、厩の中に入つて馬と一所に寝る事になつて居ました、そして、いつも、此紳士が散歩に出かける時には、厩の前まで來て、犬を呼んで一所に連れて行くのですが、其時には、又此馬が、心配さうな風をして肩の上から犬を眺めて、丸で「どうか、私も一所に連れて行つて頂戴」といふ様な調子で、高く、嘶くのでありました。そして、犬が、厩に歸つて來ると、馬は、いきなり高い聲で嘶きます、犬は、又馬にかき上つて行つて馬の鼻を咥めてやります、すると、馬は其御禮に齒で以て、犬の脊中をこすつてやります、或時のこと、馬は馬丁と一所に外に居りますし、犬も外で運動して居りました所が、外から大犬がやつて來て、忽ち、此飼犬を噛み伏せました、馬は

此有様を見ると、いきなり、兩耳を立て、止める馬丁の手をふり離して、彼の犬に突進して其脊中に噛み付いて、友犬を離なさせましたが、可愛相に、大犬は其爲めに、脊中の肉を一片噛み取られました

(四)軍隊附きの馬

久しく、軍隊の用になれた馬だといふと、非常に兵隊さんの、練兵が好きになります、或る博物學者の言ふ所によると、年老つた軍隊の馬が、殆んど、骨と皮とに瘠せて居つてさへ、太鼓の音や喇叭の響を聞くと、忽ち、若返つて来て、若し、兵隊の行進でも見ようものなら、自分も夫に従つて行かうとして中々止められないといふことです、

嘗て、英吉利のギレンスビーといふ將軍が、印度で戦死しました時、將軍の愛馬は、部下の將士等が

大切に於て、英國まで連れて參つて居りましたが、やがて、夫を或る金満家に賣りました、然し、名譽の馬ですから、大事にして死ぬまで安樂に養つて置かうといふ、其紳士の考でありました。所が其軍隊が進軍して行つて仕舞つて、喇叭の音が遠くに消え去るといふと、さあ、此軍馬が、ふさぎ込んで仕舞つて、食物も何も食はない、そして居る中たま〜厩から出されるのを待つて居つて、いきなり駆け出して、今迄、なれて居た練兵場まで行つて、そこで、一聲高く嘶いた後ち、斃れて死にましたといふことです。

一口話

▲流車の中で、革靴を盗まれていつて、大騒ぎをして居ると、連れの人は一向平氣で「併し、鍵さへ此